Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **42**, 59－65(1994)
武庫川女子大紀要（人文・社会科学）

中学校技術・家庭科「家庭生活」領域における評価計画を組み入れた授業設計に関する一試案

―指導と評価の一体化を図るために―

田　中　洋　子
（武庫川女子大学文学部教育学科初等教育コース）

A Tentative Proposal for a Lesson Plan and Evaluation in the Field of Home Life

: a study of correlation between teaching and evaluation in Industrial Arts and Homemaking

Yoko Tanaka

Department of Education, Faculty of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

One of the aims of Industrial Arts and Homemaking in the new cource of study issued in 1993 was to foster students'nature and develop their capability so that they can live independently in society. To attain this aim, we should re-examine education from a new perspective of scholastic achievement, change our teaching material and methods, and improve of evaluation.

The field, "Home Life," has newly been added to Industrial Arts and Homemaking since the 1993 school year, and it is supposed to be learned by both boys and girls in junior high schools. We need to make a minute teaching and evaluation plan so that students may motivate themselves toward this subject to live a better life.

This paper discusses a teaching plan and a way of evaluation under the topic of family life and family relations.

緒　　言

家庭の教育力の低下が指摘される現在，中学時代に家庭や家族のことについて考えさせることは，将来の生徒自身の生き方に少なからず影響を与えることができる．教師は，生徒に「家庭生活」領域の学習を意欲的に取り組ませることにより，よりよい生き方を考えさせるきっかけを与えなければならない．

そのためには，新しい学力観に立つ学習指導の展開が必要となる．新しい学力観に立つ学習指導を進めるためには，新しい評価観が必要である．新しい学力観と評価観により，指導と評価の一体化を図ることができ，生徒の学習意欲を高めることができる．指導と評価の一体化という言葉は，今に始まった言葉ではない．しかし，毎日の授業のなかで，このような視点からの授業研究が十分であったとは言い切れない現実がある．

それ故，この時期に，指導と評価の一体化を図るために，評価計画を組み入れた授業設計を研究することはこれからの家庭科教育にとって意味のあることと考えた．

そこで，平成3年度に筆者が作成した「家族の生活と家族関係」の学習指導案[1]に修正を加えて，評価計画を組み入れた授業計画案を作成した．

評価計画を組み入れた授業の設計

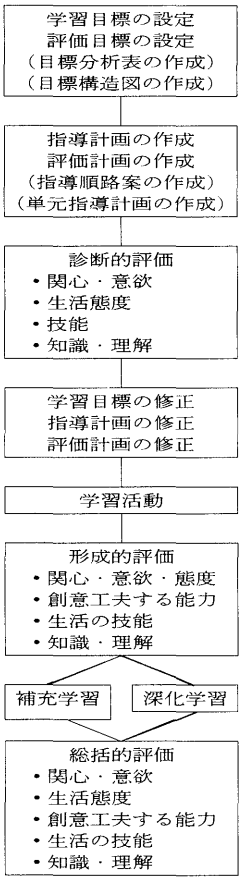
21世紀に生きる生徒には，豊かな心をもち，たくましく生きる人間として育ってほしいという願いのもとに，学習指導要領，生徒指導要録が改訂された．このような生徒の育成のためには，生涯にわたって学び続けようという自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力が求められており，個性を生かす教育の充実が必要であり，これまでの知識･理解，技能重視の学力観から，「関心･意欲･態度」や「思考力･判断力」を重視した新しい学力観へと発想の転換が図られなければならない．

また，「関心･意欲･態度」「思考力･判断力」を適切に評価し，指導に生かしたり，生徒の学習意欲を高めたりすることに役立てるためには，今まで以上に綿密な授業の設計が大切となる．B. S. Bloom は「教師の主要課題は，まず第1に，生徒にどのような変化を望むのか，またその過程で生徒を援助する場合，自分達がどのような役割を演ずるのかを，できうる限り明確にすることである．第2の課題は，教授活動の途中ないし完了時に生じるものであって，生徒が望ましい方向に変化したかどうか，また，どのような類の予期しなかった成果が得られているかを明らかにすることである．」[2] という．このような課題にせまるためには，授業の設計と同時に評価計画が必要である．そこで，**Fig. 1** のような授業の設計から評価までの手順を作成した．授業設計の様式については，梶田叡一の考案によるものを一部手直しして用いた．[3]

1　学習目標(評価目標)の設定

学習の結果，生徒がどのように変容したのかを評価するためには，学習目標と評価目標は一致していることが必要である．そこで，学習目標と評価目標を一致させた目標分析表の作成を試みた．

Fig. 1. Procedure of Teaching and Evaluation



指導要録の趣旨を生かすため「関心･意欲･態度」「創意工夫する能力」「生活の技能」「知識･理解」を横軸にとり，縦軸を題材で区分し，学習目標を洗いだし，該当すると思われる欄に当てはめるという2次元マトリックスを作成した．

技術･家庭科は，知識や技術をいくら身につけたとしても，生活のなかで生きて働く力となり，実践できなければ意味がない教科であり，新しい学力観を生かすことが最も望まれる教科である．

それぞれの題材の目標を達成することが「家庭生活」領域の目標を達成し，技術･家庭科の目標の実現につながり，生活のなかで生きて働く力となる．

そこで，目標との関連を明らかにするために，

(1) 技術･家庭科の目標
(2)「家庭生活」領域の目標
(3)「家族の生活」の目標

について目標分析を行った．

(1) 技術･家庭科の目標分析

学習指導要領の目標「生活に必要な基礎的な知識と技術の習得を通して家庭生活や社会生活と技術とのかかわりについて理解を深め，進んで工夫し創造する能力と実践的態度を育てる．」[4] の目標分析を行い，**Table 1** のような目標分析表を作成した．

目標分析の際には，生活の技能や知識･理解，態度などは，客観的な評価をしやすくするために，「～ができる」というように，できるだけ具体的な行動の形で表現するようにした．

(2)「家庭生活」領域の目標分析

学習指導要領「家庭生活」領域の目標「家庭生活に関する実践的･体験的な学習を通して，自己の生活と家族の生活との関係について理解させ，家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる．」[5] を分析すると **Table 2** のように整理できる．

Table 1.　Analysis of Objectives in Industrial Arts and Homemaking

「生活に必要な基礎的な知識と技術の習得を通して，家庭生活や社会生活と技術とのかかわりについて理解を深め，進んで工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる.」

生活への関心・意欲・態度	生活を創意工夫する能力	生活の技能	生活についての知識・理解
・生活や技術について関心をもつ ・進んで実践する態度を育てる	・課題を解決するために進んで工夫し，創造する能力を育てる	・生活に必要な基礎的な技能を身につける	・生活に必要な基礎的な知識を身につける ・家庭生活や社会生活と技術とのかかわりについて理解を深める

Table 2.　Analysis of Objectives in Home Life

「家庭生活に関する実践的・体験的な学習を通して，自己の生活と家族の生活との関係について理解させ，家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる.」

生活への関心・意欲・態度	生活を創意工夫する能力	生活の技能	生活についての知識・理解
・家庭生活に関心をもつ ・自己の生活と家族の生活との関係に気づく ・家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる	・家庭生活をよりよくするために工夫している	・家庭生活をよりよくするために必要な技能を身につけている	・自己の生活と家族の生活の関係について理解している

Table 3.　Analysis of Objectives in Family Life

小題材	生活への関心・意欲・態度	生活を創意工夫する能力	生活の技能	生活についての知識・理解
家庭の機能	・家族それぞれが一生懸命生活していることに気づく		・家庭の機能について調べたりまとめたりすることができる	・家庭は家族それぞれの生活の場であることがいえる ・家庭生活の内容がいえる（衣・食・住生活，保育，休養 など） ・家庭生活の特徴がいえる（社会の基本単位，愛情と相互理解により成立，安らぎの場） ・家庭の基本的な機能が説明できる（休息の場，経済生活の土台としての場，子どもを育てる場，衣・食・住生活の場，高齢者・病弱者保護の場 など）
家庭生活の意義	・自分と家族の関係に気づき家族の生活に関心をもつ ・家庭の大切さに気づく ・家族の一員として積極的に家族に協力し家庭生活をよりよくしようとする	・家族の一員として家族に協力し家庭生活をよりよくする方法を考えることができる	・家族の一員として家族に協力し家庭生活をよりよくすることができる（家族のなかで役割分担をすることができる．生活時間の計画を立てることができるなど）	・家庭の大切さが説明できる． ・家族相互の理解と協力によって家庭生活が営まれていることが説明できる．
家族の生活と家族関係	・家族の生活と家族関係について考えようとする（A1） ・自分が家族のかけがえのない一員であることに気づく（A2） ・家族員一人一人の立場を理解しようとする（A3） ・家庭において自分の役割を果たそうとする（A4） ・日常生活にマナー（挨拶，報告，プライバシーなど）が大切であることに気づく（A5） ・日常生活のマナーを実践しようとする（A6）	・家族の一員として自分の役割を考え，よりよい家族関係を築くよう工夫している（A7） ・自分の家庭でよりよい人間関係のためのマナーを考えている（A8）	・家族のなかで自分の役割を果たすことができる（B1） ・日常生活のマナーが実践できる（B2）	・家族の生活はその構成により立場や役割に違いがあることを説明できる（A9） ・健全な家庭生活のためには家族関係を円滑にすることが大切であることを説明できる（A10） ・家庭内での自分の立場や役割について説明できる（A11） ・日常生活のマナーがよりよい人間関係のために大切であることが説明できる（A12）

前提目標・家庭の機能が説明できる．（R1）
発展目標・家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる．（C1）

(3)「家族の生活」の目標分析

中学校「家庭生活」領域は「自分の生活と家族の生活との関連をはかる立場から」学習させることになっている．各家庭にはそれぞれの生活のパターンがあり，理想的な家庭というものはない．それ故，家族の生活を考えさせるにあたっては，家族の生活に関心をもたせ，家族の一員として家庭生活をよりよくすることができるようにしたい．

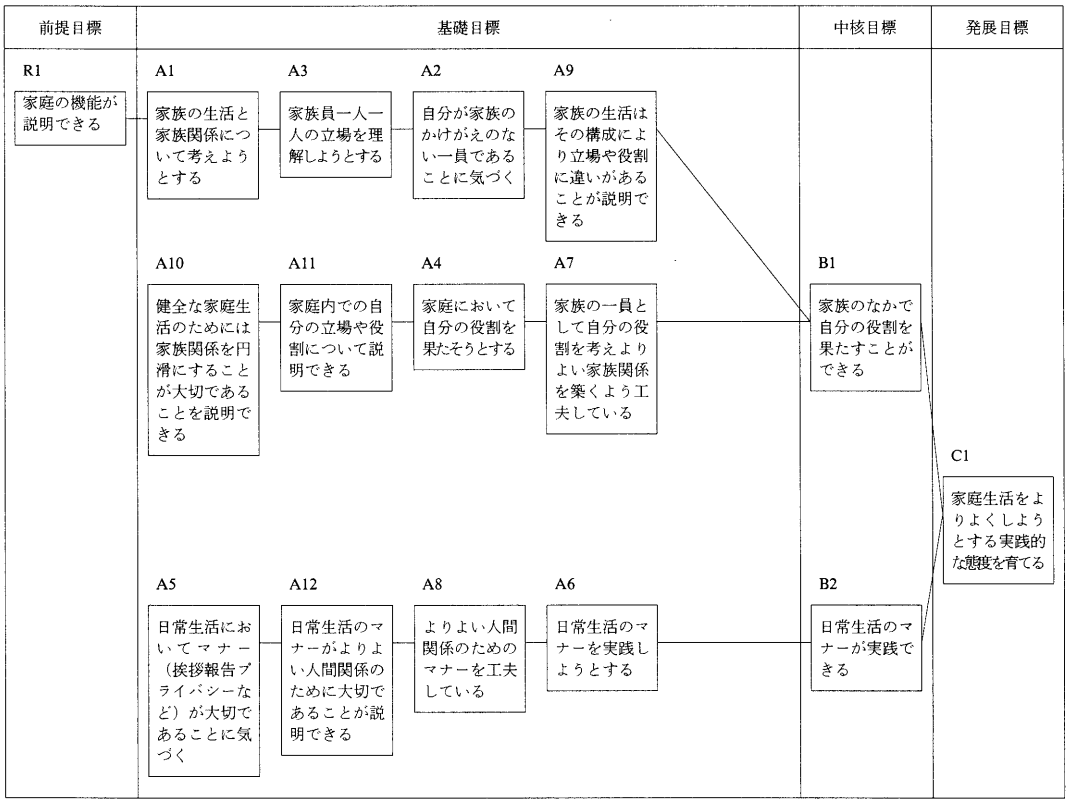
このような視点から，「家庭生活」領域の「家族の生活」の目標を洗いだし，**Table 3** のような目標分析表を作成した．

「関心・意欲・態度」を例にとって「家族の生活」の目標が「家庭生活」領域や「技術・家庭科」の目標とどのように関連しているかをみてみると，「家庭において自分の役割を果たそうとする」という意欲に関わる目標は「家庭生活」領域の「家庭生活をよりよくしようとする実践的態度を育てる」につながる．さらには，技術・家庭科の目標である「進んで実践する態度を育てる」という態度目標に発展してゆく．要するに，家族のなかで，「自分の役割を果たそう」と努力することが「生活をよりよくしよう」と進んで実践する態度の育成につながるといえよう．技術・家庭科の目標を達成するためにも，生徒の興味・関心の低い「家族の生活」について意欲的に学習し，生活態度の変容に迫ることができるような授業設計が必要となる．

2　目標構造図と指導順路案の作成

「家族の生活」のなかの小単元「家族の生活と家族関係」の目標構造図を作成するために，洗いだした目標のなかから，本質となる目標2つを中核目標として位置づけた．その他の目標は基礎目標とした．さらに，すでに学習している目標を前提目標，できれば達成させてやりたい目標を発展目標として，**Fig. 2** のような目標構造図を作成した．

Fig 2.　Categories of Objectives



技術·家庭科は，「実践的態度を育てる」ことを大切にしている教科であることから，中核目標には家庭における実践目標を取り上げた．また，発展目標では，生活全体を総合的に向上させることをにねらいをおいて作成した．

目標構造図をもとにして，**Fig. 3** のような指導順路案を作成した．

Fig. 3. Allotment of Teaching

（第1～2時）	R1—A1—A3—A2—A9—A10—A11—A4—A7—評価（教師）
（課　外）	B1—評価（教師）
（第 3 時）	A5—A12—A8—A6—評価（教師）
（課　外）	B2—評価（教師）
（課　外）	C1—評価（教師）
（第 4 時）	評価（自己）—補充 —深化

3　評価計画を組み入れた指導計画の作成

指導と評価の一体化を図るためには，指導計画を作成する際に，評価計画をあわせて立案しておくことが望まれる．**Table 4**～**Table 5** は「家族の生活と家族関係」の評価計画を組み入れた指導計画である．

評価計画の作成にあたっては，目標つぶしの授業にならないような評価規準を設定することが大切である．そこで，評価項目をできるだけ少なくするとともに，授業中には観察による「関心·意欲·態度」の評価を中心にし，他の観点の評価については，ワークシートやノートによることとし，放課後の時間を活用して評価できるように心がけた．

Table 4. Teaching Plan（No1）

学習事項	時	指導順路	達成目標	学習活動	評価			
					生活への関心・意欲・態度	生活を創意工夫する能力	生活の技能	生活についての知識・理解
家族の生活と家族関係	1 2	R1 A1 A3 A2 A9 A10 A11 A4 A7	①家族員一人一人の立場や役割を考えることができる ②家族関係をよくするために各家庭で自分が実践できることを考える ③各家庭で実践できる	①「家庭の機能」復習 ②VTR「現代家族物語」視聴 ③VTRの家族と自分の家族の比較（ワークシート） ・家族構成 ・家族員一人一人の役割 ・家族内における自分の役割 ④グループ討議 自分の考えを出し合い，グループで家族員一人一人の立場や役割を考える ⑤発表 グループで話し合ったことを発表する ⑥まとめ 家族関係をよくするために各家庭で自分が実践できることを考える	画面に集中している（観察） 家族の生活と家族関係について考えようとする（観察ワークシート） 家族員一人一人の役割を理解しようとしている（ワークシート） 自分が家族のかけがえのない一員であることに気づく（観察，ワークシート） グループで話し合ったことをまとめて発表する（発表を聞く）（観察）	家族の一員として自分の役割を考え，よりよい家族関係を築くよう工夫している（ワークシート）		家庭の機能が説明できる（発表）
	課外	B1		実践する			家族のなかで自分の役割を果たすことができる（レポート）	

Table 5.　Teaching Plan（No2）

学習事項	時	指導順路	達成目標	学習活動	評価			
					生活への関心・意欲・態度	生活を創意工夫する能力	生活の技能	生活についての知識・理解
	3	A5 A12 A8 A6	①家族関係を円滑にするために必要なマナーがわかる ②自分が家庭でぜひ守りたいマナーを考えることができる ③各家庭で実践できる	①家族にいやな思いをさせた体験，家族からいやな思いをさせられた体験を話し合う ②家族関係を円滑にするために必要なマナーにはどんなものがあるか話し合う ③自分が家庭でぜひ守りたいマナーについて考える	日常生活にマナーが大切であることに気づく（発表）	家庭でのよりよい人間関係のためのマナーを考えている（ノート）		日常生活のマナーにはどんなものがあるか説明できる（発表）
	課外	B2		実践する			日常生活のマナーが実践できる（レポート）	
	課外	C1		実践する			家庭生活をよりよくするために家族の一員としての役割を果たし，家族関係を円滑にすることができる（レポート）	
	4		評価と補充・深化学習	①レポートをもとに何ができて，何ができていないかを考える ②テスト ③レポート，テスト結果に基づいて，課題学習をする				

まとめと課題

学力は指導と評価の繰り返しによって，螺旋状に向上するものであろう．学力が生活に生きて働く力として役に立つためには，次の指導に生かす評価のあり方を工夫しなければならない．

指導と評価の一体化という言葉は言うことはたやすいが，授業の展開はなかなかむずかしい．

新しく新設された「家庭生活」領域は生徒の関心が低く，学習意欲も乏しい領域である．

また，自立と依存に悩むこの時代に，家族の一員として家庭生活をよりよくしようとする実践的態度を身につけさせるためには，指導と評価の一体化を図る授業の展開が望まれる．

そこで，「家族の生活と家族関係」の題材について，評価計画を組み入れた授業の設計を検討した．

授業の設計にあたって，留意したことは，次の点である．

① 学習目標とあわせて評価目標を設定すること

② 客観的な評価をしやすくするため，目標はできるだけ具体的な行動の形で表現すること

③ 「家庭生活」領域，技術・家庭科のねらいにせまることのできる目標構造図，指導順路案を作成すること

③ 目標つぶしの授業にならないよう評価規準を作成すること

以上の事項に留意しながら，評価計画を組み込んだ授業設計を作成した．

しかし，次のような課題が残されている．

① 具体的でわかりやすい評価の判定基準を作成すること
② 評価がむずかしいとされている「関心・意欲・態度」「思考力・判断力」などの評価用具を開発すること
③ 実践による検証をすること

引用・参考文献

1) 田中洋子，研究紀要第102集，兵庫県立教育研修所，兵庫，pp77–78，平成3年
2) B.S.ブルーム他(梶田叡一・渋谷憲一・藤田恵璽訳)，教育評価法ハンドブック，第一法規出版，東京，第18版，pp24，平成4年
3) 梶田叡一・加藤明，形成的評価による授業設計マニュアル－目標分析から単元指導計画まで－，第一法規出版，東京，pp13–32，昭和61年
4) 文部省，中学校指導書　技術・家庭編，開隆堂出版，東京，pp7，平成元年
5) 前掲3)，pp61，平成元年